



Title	チリのマプーチェ : 1550年-1641年 : スペイン人に対する抵抗と同化
Author(s)	千葉, 泉
Citation	Estudios Hispánicos. 1991, 16, p. 89-111
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97920
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

チリのマプーチェ：1550年 - 1641年

— スペイン人に対する抵抗と同化 —

千 葉 泉

<序>

マプーチェとは、チリにおける最大の少数民族集団の名称である。ベンゴアは、1982年の国勢調査の予備資料から、今日農村に住むマプーチェ人口を約30万人、これに都市へ移住しながら出身共同体とつながりを持つ者を含めたマプーチェ総人口を約40万人と推定している。これはチリの総人口の約3.5%を占める [Bengoa 1982:49-50]。

征服者スペイン人が到来した当時、他民族を支配しつつ中央集権的な国家を形成していたアステカ、インカなどの原住民集団と異なり、マプーチェは比較的小規模な地区ごとに分散して居住していた。そして、スペイン人に対しても、短期間に征服されその支配下に入った前二者と異なり、長期にわたって軍事抵抗を行ない、少なくともビオビオ川からトルテン川にかけての地域は、植民地時代を通じて自立的な性格を強く保持し続けた。つまり、スペイン人到来時の社会構造という点でも、スペイン人との関係という点でも、日本でよく紹介されているインカやアステカとはかなり異なったものだといえるだろう。

チリにおいて、マプーチェはどのようなイメージを持たれているのであろうか。1つの典型的なイメージは、「スペイン人に対して徹底的に軍事抵抗し、独立を守り通した勇敢な民」といったものであろう。カウポリカン、ラウタロ、メスティーン・アレーホといった対スペイン人戦の英雄は、彫像や文学、あるいは歌の格好のテーマとなってきた。

ベンゴアによれば、マプーチェに対するこうしたイメージは、19世紀の初頭スペインからの独立運動を指導したチリのクリオーリョ（植民地生まれのスペイン人）層もいだいていた。彼らはマプーチェのスペイン人に対する戦いを、みずからの反スペイン闘争の先駆と考え、これを理想化して愛国的な演劇の中に描いた [Bengoa 1987:135, 139-141]。

ところが、いざ独立戦争が始まってみると、こうしたクリオーリョたちの意識とは裏腹に、マプーチェの大半の集団は「スペイン王」の側にたち、独立派のクリオーリョたちと数年にわたる「決死戦」を戦ったのである。また、少数の集団は独立派側に立って参戦し、マプーチェ同士の激しい軍事衝突も起こっている。

これと似たような状況は独立後も続く。マプーチェは19世紀を通じ、さまざまな外部集団と積極的に接触し、同盟関係を結ぶのであった。あるものはサンティアゴの中央政府の勢力や軍と通じ、あるものは南部コンセプシオンの連邦派と結び、アルゼンチンのウルキサ政府との同盟を模索した。つまり、多くのマプーチェ集団が、外部社会と深く関わり、しかもマプーチェ社会全体としては分裂していた、という状況である。そして、1860年代に始まるチリ軍の攻勢に対してもマプーチェは団結して対処せず、1883年までにマプーチェの領域は占領され、土地の大部分を剝奪される。このような結末の少なくとも一因として、上に述べたような状況が影響していたことは想像にかたくない。

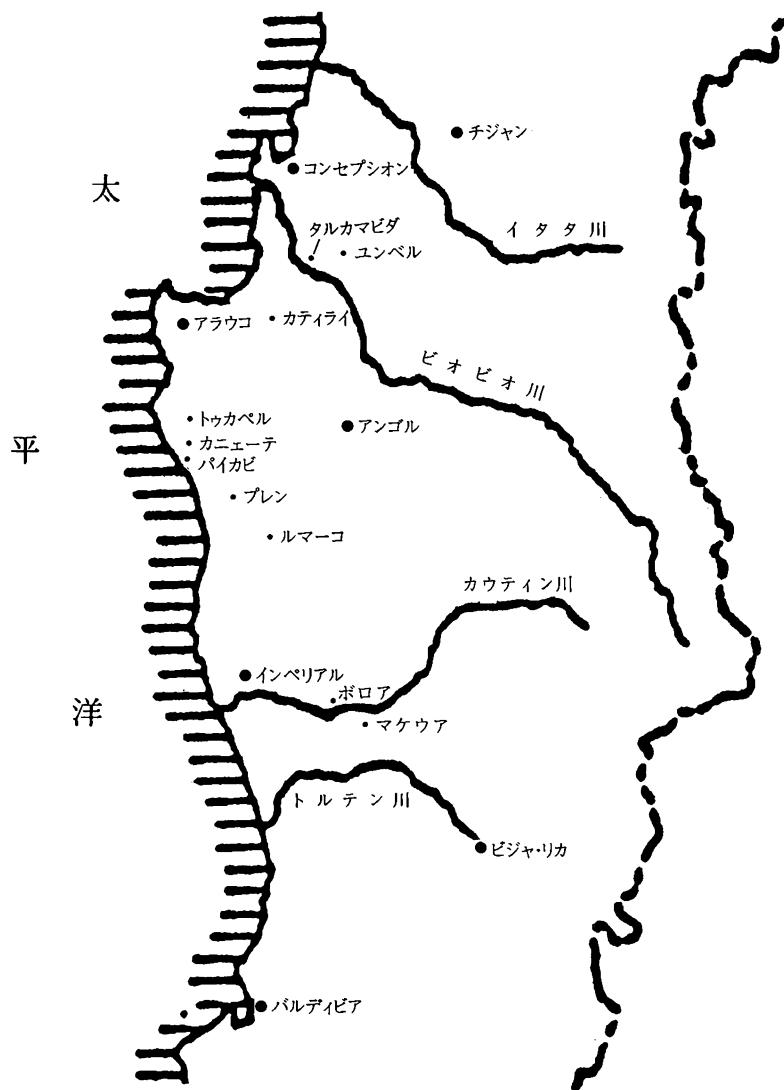
こうしたことから、スペイン人が到来した16世紀中葉から、19世紀初頭に至るまでの2百数十年の間に、マプーチェ社会に次のような変化が起こったのではないかと推定される。つまり、当初スペイン人に対して頑強に抵抗したという性格の強いマプーチェが、19世紀初頭までには何らかの形でスペイン人＝クリオーリョ系社会と深く関わっていたこと。そして外部社会に対してマプーチェ社会が当初示していた団結的な性格が失われ、分裂状態にあったことである。

もしそうだとすれば、こうした変化が何故、どのようにしてマプーチェ社会に起こっていったのだろうか。

＜地図1＞チリ全図



＜地図2＞チリ南部（一部）



本稿では、このような問題意識を念頭に置きながら、とりあえず、スペイン人征服者ペドロ・デ・バルディビアがコンセプシオン市を建設した1550年から「キジンの和平」が結ばれた1641年までの時期にしぼって、マプーチェ社会がスペイン人の征服と支配の意図に対して、どのような対応を示したのかについて見ていくことにする。

この時期は、基本的にはスペイン人側とマプーチェ側がほぼ恒常的な形で敵対関係にあった時期である⁽¹⁾。しかしながら、マプーチェはスペイン側社会からの影響を全面的に拒絶したわけではなく、ある側面においてはその文化的・人的要素をむしろかなり積極的に導入していた、と思われる。

第1節では、スペイン人側の対マプーチェ政策、第2節ではこれに対するマプーチェ社会の抵抗について述べる。そして第3節では、マプーチェ社会によるスペイン側の文化要素の導入について見ることににより、16世紀半ばから17世紀半ばにかけて、基本的にはスペイン人に抵抗していたマプーチェ社会がスペイン社会に対して取った対応のもう一つの側面を探る。

1. スペイン人側の方針：軍事的征服と支配の試み

1540年にペルーを出発したスペイン人征服者ペドロ・デ・バルディビアがチリに到着し、サンティアゴを建設したのは1541年のことであった（地図1参照）。

このころ、チリ南部、イタタ川流域からトルテン川に至る地域に、自らを「マプーチェ mapuche」と呼ぶ民族が住んでいた（地図2参照）。「マプ mapu」とは土地、「チェ che」とは人々をさす。したがって、マプーチェとは「土地の人々」という意味である⁽²⁾。

南進したバルディビアは、1550年から1553年にかけて、マプーチェ居住地域にもコンセプシオン、インペリアル、ビジャ・リカ、アンゴルなどの都市やアラウコ、トゥカペル、プレンの要塞を建設する。

この時期のスペイン人のマプーチェに対する方針は、チリの他の原住民の場合と同様あくまでも軍事的な形でこれを征服することであった。そして征服の主な目的は、砂金の採取、住宅建築、耕作などのためにその労働力を徴発することにあった [Marmolejo:59]。

都市が建設されると、軍事功労者などに対する報酬として、一定地域の

原住民を割り振る「エンコミエンダ」という制度を通じて、原住民の労働力の徴発が行なわれた。特に、キラコージャ（コンセプション付近）、インペリアル、ビジャ・リカといった豊かな砂金地域では、2万人以上の原住民が働き、1日で200リブラ（約100キログラム）以上の砂金が採取されるようなこともあった[Ferrando Keun 1986:21]⁽³⁾。

しかし、他民族の支配を受けず、中央集権的な構力構造も持たなかったマプーチェは、こういったスペイン人の支配に対し、たびたび反乱を起こして都市や要塞を包囲したり破壊したりした。したがって、マプーチェ居住地域、特にビオビオ川からトルテン川にかけての地域においては、労働力の徴発を安定的に行なうことは困難であったと推測される⁽⁴⁾。

こうした状況を反映して、総督領であったチリの最高の行政官である歴代の総督の大半は、サンティアゴではなく、南部コンセプションへ直接赴任し、任期の大部分をこの南部において過ごすことを余儀なくされていた[Ferrando Keun 1986:202]。

当時、征服活動あるいはマプーチェの蜂起への対応に当たったスペイン人の軍隊は、総督を最高指揮者としつつも、軍役と徴発義務を負ったエンコメンデーロスを中心に構成される、臨時的性格の強い民間軍であった。もちろん王室やペルー副王などから武器や兵員の援助を受けることもしばしばあったが、あくまでも臨時的な措置に過ぎず、軍の規模・質などの点で極めて不安定な状態にあった[Villalobos y otros 1974:105-106, Ferrando Keun 1986:119]⁽⁵⁾。

1598年に始まるマプーチェの全面蜂起に対し、マプーチェに対する支配を早期に確立するため、王室は1600年、スペイン領植民地で唯一の専門的な兵士からなる常備軍をチリに設置する。この措置により、毎年定額の資金がペルー副王領から送られ、兵士への支払い、武器その他の物資の供給に充てられることになった。つまり、今度は王室の公式の援助のもとに、あくまでも軍事的な形でマプーチェを完全に征服し、支配を固めるという方針が強化されたわけである⁽⁶⁾。

一方、原住民人口の減少に悩む中央部のエンコメンデーロやアシエンダ（大土地）所有者らの労働力需要を受けて、1608年の勅令で、戦闘で捕虜にした原住民を奴隷にすることが許可される。もちろん、これ以前も戦争捕虜を奴隷化する習慣は存在したのだが、これ以降王室の許可のもとに、チ

り中央部、さらにはペルーへ売却するための奴隷の獲得を目的とする襲撃もマプーチェに対して盛んに行なわれるようになった(7)。

原住民に対する過酷な労働力徴発やマプーチェに対する奴隷獲得を目的とした攻撃といった行動に対し、スペイン側における批判が全くないわけではなかった。

例えば、王室やインディオ保護の立場に立つ修道会などの意向を背景として、マプーチェの反乱の主要な動機ともなっていた原住民の労働力徴発を租税に代えることを旨とする法令が幾度か出されている。しかしながら、原住民側の不履行や現地のエンコメンデーロスたちの反対などにあつていずれも短期間で失敗に終わっている(8)。

また、1612年から26年の間「防戦 *guerra defensiva*」と呼ばれる政策が実施されている。これは、イエズス会のルイス・デ・バルディビア神父の主導で行なわれたもので、マプーチェがたびたび反乱を起こすのは強制労働などスペイン側のマプーチェに対する不正な行為が原因であるとし、軍事的な方法の代わりに平和的な態度で接することによってのみ、マプーチェの平定と植民地への統合が可能であるという立場に基づいていた。

神父の示唆を受けて、副王モンテス・クラールロスが発した「防戦」の措置は、フェランド・ケウンによればほぼ次のようなものであった。

敵対的な者も含め、インディオを自分の土地で自由にさせる。和平に応じたインディオは労働奉仕を免除される。敵対的なインディオがそれを望むならば、教化・平定のために修道士を派遣する。奴隷化されているインディオを解放する。戦闘において捕虜になったインディオの奴隷化を禁止する。ビオビオ川をスペイン側とマプーチェ側の境界線とし、お互いに相手の領域を軍事的に侵害しない [Ferrando Keun 1986:177](9)。

つまり、第一に、スペイン人側はビオビオ川以北に撤退し、ビオビオ川以南の地域についてはマプーチェに広範な自立性を認める。そして、第二に布教を中心とする平和的手段によってマプーチェのスペイン人側社会への統合を図る、というものだといえるだろう。

こうした、スペイン人側にとっては屈辱的ともいえる「防戦」政策に、当時の歴代の総督や軍人、エンコメンデーロス、イエズス会以外の修道会など植民地権力の大半の人々は反対で、あくまでも積極的な軍事攻撃によるマプーチェの征服・平定を望んでいた。

このような植民地の世論の反対にもかかわらず、常備軍費の削減を望んでいたスペイン国王とペルー副王の支持を受け、「防戦」は実施される。

スペイン軍は基本的にピオピオ川以北に退く。1612年、バルディビア神父はカティライとパイカビにおいて近郊のマプーチェたちと小規模な「交渉」を開き、ピオピオ川以南に位置する要塞の撤去や修道士の派遣が合意される。しかし、パイカビの「交渉」の合意に基づいて派遣された3人のイエズス会神父が殺害されると、リベラ総督は報復措置として1613年ブレンを攻撃する。こうしてはやくも「防戦」の限界があらわになる。

その後もマプーチェ側は平静化するどころか、ピオピオ川沿いの要塞をしばしば攻撃し、さらにはピオピオ川よりも北にあるユンベル要塞さえ襲撃するありさまであった。一方こうしたマプーチェの攻勢に対し、スペイン側もピオピオ川以南の地域に報復攻撃を行なう。

こうして「防戦」は事実上無効化し、最大の支持者であった国王フェリペ2世の死を経て、1626年正式に中止される。そして、1641年のキジンの和平に至るまで、再び積極的な攻撃方針が続行されるのである¹⁰⁰。

以上から、16世紀半ばから17世紀半ばにかけてのスペイン人側の対マプーチェ政策の方針をまとめておこう。スペイン人はこの時期、砂金開発や耕作のための労働力を利用するためマプーチェを軍事的に征服・支配することを試み、あるいは奴隷として売却することを目的として、これを攻撃していた。労働義務の租税による代替の試みや「防戦」政策に見られるように、より平和的な形でマプーチェの統合を試みるものが全くなかったわけではない。しかし、エンコメンデーロスを中心とする植民地権力の利害、マプーチェ自身の抵抗などから、こうした試みは成功せず、結局のところは軍事的な手段による征服と支配という方針が支配的であったといえるだろう。

2. マプーチェ側の対応：軍事的抵抗

(1) 社会構造：小地区に分散した社会

スペイン人による労働力徴発のための支配、あるいは奴隷獲得のための軍事攻撃に対して、マプーチェはどのように対応したのであろうか。それについて述べる前に、スペイン人到来時のマプーチェ社会がどのような構

造になっていたのかについて簡単に触れておこう。

スペイン人到来期のマプーチェ社会には中央集権的な権威は不在で、最大の恒常的な社会単位は「レボ *levo* (*lebo* とも)」あるいは「レウエ *re-hue*」と呼ばれる地区レベルの組織にすぎなかったと思われる。

バルディビアに随伴していた兵士ビバルのクロニカによると、レボの人口は通常1500人から2000人だが、それ以上の人口を抱えるものもあった。レボの成員は、一年に数度特定の場所に集まり、飲食をしながら裁判を行ない、合意をはかり、命令を下していた [Vivar 1987:221]。

カサノバの研究によれば、各レボの長は神話的な祖先のもっとも直系の子孫と考えられる人物で、スペイン人はこれを「カシーケ *cacique*」と呼んだ。カシーケの基本的な役割は、レボを守護するトーテムへの信仰を通じて、レボ成員の結束を図ることであった。また前述の宴会的集会の場でカシーケは、集団成員の間の友好関係、協力関係の維持に努めていた [Casanova 1989:40, 44]。なお、成員はカシーケに対して、一方的な形での労働奉仕や租税などの義務は負っていなかったと思われる⁽¹¹⁾。

したがって、「レボ」という集団が恒常的なものであったにせよ、その長であるカシーケは、少なくとも平時においてはレボ成員を強制的に支配・統治するというよりは、これを精神的に統合する仲介者のような性格の方が強かったのではないかと思われる⁽¹²⁾。

こうした状況を反映して、人口が集中する集落のようなものもなく、耕地の周囲に「ルーカ *ruca*」とよばれる大きな家が、数戸集まっていた程度であった [Instituto Geografico Militar 1987:161]。

要するに、当時のマプーチェ社会には中央集権的な権威は不在で、自立的な性格の強い家族の地区レベルでの集合体であるレボが、最大の恒常的な社会単位であったといえるだろう⁽¹³⁾。

(2) 共通の敵に対する抵抗

このように中央集権的な権力を欠いていたマプーチェ社会が、必ずしも調和のとれた平和的な社会であったわけではなく、集団間（例えばレボ間）の抗争が起きていたことは、ビバルの叙述などからうかがわれる [Casanova 1989:36; Zapater 1989:67]。

しかしながら、外部から侵入し、自分たちを力で支配しようとするスベ

イン人に対して、マプーチェはこれを敵とする強い共通意識を抱き、しばしば多数のレボを集結させた大軍事同盟を形成し、これに抵抗したのであった。

こうした同盟は、すでにバルディビアの時代から見られたものと思われる。

同時代の兵士ロベラのクロニカに基づいたフェランド・ケウンの叙述によれば、スペイン人の支配に対して強い不満を感じていたマプーチェたちは、地区レベルにおける小規模な集会を経たのち、スペイン人に対する一斉蜂起を計画すべく、各地区の代表の大集会を開いた [Ferrando Keun 1986:22]。

エルシージャによれば、この集会にはそれぞれ3000名から6000名ほどの戦士を抱えた18名の代表者が集まっている。たとえばコロコロは一人で6000名、パイカビは3000名の戦士を率いて参じた、とされている [Ercilla 1970: 49-51]。前述したように、各レボの人口が大体2000名前後であるとすればこれらの代表一人一人が、おそらくかなりの数のレボを一時的にまとめる軍事指導者として参加したのではないかと推定される。こうして集まった代表の中から、大きな木片を肩にかついで歩き回れる時間の長さを競う、という我慢比べにより、丸二日これに耐えたカウポリカンが全軍の臨時指導者に選ばれた [Ercilla 1970:55-60]。

こうして、共通の指導者を得たマプーチェ軍は、1553年まずトゥカベル要塞を攻略し、さらにラウタロの作戦（後述）に基づいて、トゥカベルへ赴いたバルディビア軍をほぼ壊滅させるのに成功するのである [Ferrando Keun 1986:22-28]¹⁴。

征服をすでに既存のものと確信していたスペイン人たちは、総督バルディビアの死によってパニック状態に陥り、マプーチェの総攻撃を前にプレン要塞、アラウコ要塞、アングル市、ビジャ・リカ市、さらにはコンセプション市をも放棄した [Ferrando Keun 1986:32-33]。

勢いを得たマプーチェ軍はラウタロの指揮のもとに、サンティアゴ攻略をめざすが、バルディビアの後を継いだフランシスコ・デ・ビジャグラの指揮するスペイン軍の奇襲を受け、1557年マタキート川付近で死亡する。さらに翌年、総大将カウポリカンもスペイン人の策略にかかり、カニエーテ要塞で殺される。

こうして、一次的にマプーチェの平定に成功したスペイン人は都市や要塞を再建し、再びマプーチェの労働力の徴発を始める。しかし、今度もマプーチェは決して完全に征服されたわけではなく、これ以降もたびたび要塞や都市を攻撃した。時には小地区レベルでのゲリラ戦を展開する。そして時にはより広い地域のマプーチェが同盟を結び、新しい軍事指導者のもとにスペイン人に対抗する。つまり、スペイン人の支配に対するマプーチェの抵抗は、さまざまな地域で、そしてさまざまな形でこの後も繰り返されるのである⁴⁵⁾。その結果、ピオピオ川以南の都市や要塞の多くは、たびたび包囲されたり攻撃を受けたりし、放棄されることも少なくなかった。

さらに1598年には、ペランタル率いるマプーチェ軍が、ルマーコ川付近のクララバの戦いでガルシア・オニエス・デ・ロジョーラ総督を殺害すると、この勝利を皮切りにマプーチェは全面蜂起に立ち上がる。その結果、インペリアル、アングル、ビジャリカといったスペイン人によって建設された都市は1604年までに完全に放棄・破壊され、これ以降ピオピオ川からトルテン川に至る地域から、都市と呼べるものは消え去ることになる。

こうしたマプーチェの大攻勢を前に、既に見たように1600年に王室の方針で常備軍が設置される。また、1608年の勅令以降、奴隷狩り目的の襲撃も盛んになる。「防戦」の失敗を経て、再び積極的な攻撃による征服方針が展開される。しかし、マプーチェ側の抵抗は止まない。もちろん、その時その時の総督の軍事上の方針やマプーチェ領域内での流行病の蔓延状況などによって、抵抗の規模や形態、参加地域、その結果などに違いはあった。しかし基本的な態度としては、少なくとも1641年にキジンの和平が結ばれるまで、マプーチェの軍事的な形での征服とその安定的な支配を望むスペイン人に対し、大半のマプーチェ集団が抵抗を続けたのであった[Ferrando Keun 1986:138-205]。

要するに、16世紀半ば～17世紀半ばにかけて、各マプーチェ集団は小規模な地区に分散して生活していたが、スペイン人に対しては共通の防衛意識を持ち、大半の集団がこれに軍事抵抗し続けた。そして、特に1598年に始まる全面蜂起ののち、ピオピオ川からトルテン川にかけての地域から都市は消え去り、この地域におけるスペイン人の影響力は著しく減退した。

3. スペイン人側文化要素の導入：抵抗のための同化

前節で述べたように、この時期のマプーチェは、スペイン人による支配の意図に対し、軍事的に抵抗してきたという性格が強いといえるだろう。しかしながら、この時期のマプーチェ社会がスペイン人側社会からの影響を機械的な形で完全に拒否したわけではなかった。なぜなら、実利的な要素、特に軍事に関わる要素については、むしろこれを積極的に取り入れた、と思われるからである。

(1) 武器

第一に、武器について見てみよう。

まず、攻撃用の武器が挙げられる。マプーチェはスペイン人到来時、槍に銅の先端を付けていたが、のちスペイン人集落の略奪によって手に入れた剣の鋼鉄の刃をこれに取って代えるようになった。スペイン人から奪った斧は、スペイン軍の通行を妨げるべく、道沿いに木を切り倒したり、木材の囲いで家を補強したり、スペイン人側の要塞の柵を破ったりするのに使われていた。また蹄鉄固定用の鉄釘を棍棒の先端に取り付けた武器は、一撃で同時に何ヵ所もの傷を相手に負わせることができた。

さらにマプーチェは、鍛冶の技術を持つスペイン人捕虜や脱走者を使って鉄製の槍や馬用の手綱、拍車などを作らせていた。

また、スペイン人基地からの脱走者を通じて、あるいはスペイン人都市の略奪によって手に入れた猟銃や火縄銃などの火器もマプーチェに利用された [Zapater 1989:59-60]。

フェランド・ケウンによれば、1557年にコンセプション付近の要塞を攻撃したさい、すでにマプーチェ軍は砂金労働に使う道具を改造した鋼鉄の先端をつけた槍、スペイン人から奪った剣などの鋼鉄製の武器を使用している [Ferrando Keun 1986:52]。

また、1600年のトルテン川付近の戦いで、マプーチェは様々な攻撃用・防衛用の武器に交えて、火縄銃を使用している [Ferrando Keun 1986:132]。

防衛用の武器についても同じような進歩が見られた。バルディビアの軍がやってきた1550年頃のマプーチェは通常防具を使用しなかったが、1555年末、ラウタロ率いるマプーチェ軍がコンセプションを攻撃した際には既にアシカの皮で作った防具で身を守っている [Ferrando Keun 1986:13,

46]。こうして、アシカやグアナコ（ラクダ科の動物）の皮を使った胴鎧、兜、盾などを作っていたのが、さらに17世紀初頭にはスペイン人のもたらした牛や馬の皮を用い、鋼鉄と同じ程堅固な防具を作り出していた [Zapater 1989:60]。

一方、弓矢や投げ棍棒などマプーチェがもともと使っていた武器は、逆に使われなくなった [Zapater 1989:60]。

こうした武器とともに、スペイン人のもたらした馬も比較的初期からマプーチェの間に広がる。彼らは恒常的にスペイン人から馬を略奪し、これを戦闘用に調教した。馬を防御するためにわき腹を牛皮で覆い、皮や縄で作った面懸や手綱を取り付けた。そして鞍は、木製の鞍枠に葉か藁の鞍敷きを取り付けたものに作り変え、あぶみも木で作った [Zapater 1989:61]。

こうした軽装の馬を用い、マプーチェは「馬乗り歩兵」の戦術を編み出した。これは、各旗手が馬の後部に歩兵を乗せ、戦闘にかかる時に、これが馬から降り、尾につかまりながら迅速に移動するというものである [Bengoa 1987:31-32]。

なおマプーチェは、すでに1570年、ブレンの平原での戦いの時には騎馬隊を使用し、正面からスペイン軍と渡り合い、これを撃退している [Ferrando Keun 1986:104-105]。

以上から、マプーチェは、スペイン人により有利な形で対抗するために、「敵である」スペイン人の武器や馬をむしろ積極的に導入し、自分なりの形で同化したといえるだろう。また、たとえ伝統的な武器であっても、実質的な効用を失うと、これを放棄することに躊躇しなかったこともわかる。

(2) 人的要素

第二に、人的要素がある。

この点で興味をひくのが、スペイン側社会にいったん統合されたマプーチェの脱走者、スペイン人やメスティーソの逃亡者や捕虜、あるいはスペイン人女性の捕虜とマプーチェ男性との間に生まれたメスティーソなどが「マプーチェ軍」の軍事指導者や協力者に転化する例が数多く見られたことである。

まずマプーチェの例を見ておこう。おそらくその最も顕著な例は、ラウタロであろう。ラウタロは、あるカシーケの息子で、若い時にバルディビ

アによりスペイン側社会に連れて行かれる。アロンソと名付けられた彼はバルディビアの信頼を得、馬丁として仕える。こうして、バルディビアのもとでスペイン人の性質や戦術などについての深い知識を習得した彼は、のちに脱走し、前述のトゥカペルにおけるバルディビア攻撃の際にマプーチェ軍を指揮するのである。

以下、マルモレホのクロニカに即してラウタロの行動を見てみよう。

バルディビア攻撃の方策を練るマプーチェたちの前に進み出たラウタロは、スペイン人も馬も不死身ではなく、暑さに弱いこと、将来強制労働が今よりもずっと苛酷なものになることなどを説いた。そして、カシーケたちの信頼を得ると、バルディビアに対抗するため、彼らに次のような戦術を伝授した。

バルディビアがトゥカペル要塞に到着するのを要塞近くの丘で待つ。軍勢をいくつかの分隊に分ける。彼が到着したら、一つの隊が道を塞ぐようにして敵軍に攻撃をしかける。この隊がくずされたら別の隊が攻撃をしかける。以下、交替で連続攻撃を行なう。スペイン人側の馬が疲れたところで、ラウタロの合図で一斉に突撃する。また、近辺一体に伝令を送り、バルディビア軍の背後から武器を持って近付き、スペイン人が退散する時に通るとされる全ての道を塞いでおくように指示する。こうしたラウタロの作戦を聞いたマプーチェ軍の士気は大いに上がり、彼の指揮のもとバルディビアの軍勢をほぼ壊滅させることに成功するのである [Marmolejo:62-68]¹⁶。

さらに、こうしたマプーチェ出身者だけではなく、スペイン人やメスティーソの脱走者や捕虜がマプーチェ社会に導入され、スペイン軍に対してマプーチェを軍事指導したり、武器製造など特定の技術をマプーチェに提供する、というような例がさまざまな地域で見られるようになる。

まず、スペイン人について見てみよう。

1584年頃、ビオビオ川北岸の地タルカマビーダに、スペイン人ですぐれた火縄銃撃ちのヘロニモ・エルナンデスと一人のムラート（スペイン人と黒人の混血）が住み、マプーチェに軍事上の秘密を伝授していた [Ferrando Keun 1986:114]。

また、16世紀の末、インペリアル付近では、脱走してマプーチェ側についた修道士ファン・バルバの例が記録されている。彼は同じくスペイン人のヘロニモ・ページョとともに、マプーチェに軍事情報を流し、適確な助

言を与えていたという [Ferrando Keun 1986:130]。

こうした脱走者の他、戦闘において捕虜にしたスペイン人も、マプーチェは軍事その他の実利的な目的に利用していた。

同時代のクロニカに依拠したシルバ・ガルダメスの研究によれば、16世紀末の大反乱以降の時期(1598-1657)、マプーチェは戦闘で捕虜にしたスペイン人を全て殺していたわけではなく、何らかの形で自分たちの役に立つものは、生かしておいたと推測される。すなわち、鍛冶の技術を持つもの(武器製造のため)、火薬を作る技術を持つもの(スペイン人都市を破壊した際に押収した大量の銃や大砲を利用するため)、帽子職人や靴職人、読み書きのできるもの(捕虜交換のための通信文を担当させるため)、親戚に重要人物がいる著名な人物(スペイン側に捕虜になっている家族との交換のため)、新米の兵士などがそうであった [Silva Galdames 1990:15-16]。

こうしたスペイン人捕虜の多くはマプーチェ女性と関係を持ち、中には多くの子孫をもうけ、マプーチェの習慣に同化するものもあった [Silva Galdames 1990:16-17]。

同じような例はメスティーンにも見られた。

例えば1584年、アラウコ盆地の戦いでスペイン側の捕虜になったメスティーンのアロンソ・ディアスは、10年もの間マプーチェとともに暮らし、彼らに戦術を教えてきた [Ferrando Keun 1986:114]。

また、1606年にマプーチェ領域の南部にあるボロア要塞をたびたび攻撃したマプーチェ軍を指揮していたのは、フアン・サンチェスというメスティーンと2人のマプーチェのカシーケであった [Ferrando Keun 1986:165]。

17世紀初頭、スペイン軍の兵士、特にメスティーンの兵士が脱走してマプーチェ側に移り、マプーチェ軍の指導者になるという例がしばしば見られるようになる。ケウンは、こうした現象が起きたスペイン人側の要因として、メスティーン兵がスペイン軍の中で昇進に関して差別を受けたり、スペイン人によって社会的に軽蔑されたりしていたという事実を指摘している [Ferrando Keun 1986:166]。

次に、捕虜になったスペイン人女性と、マプーチェ男性との間に生まれたメスティーンについて見てみよう。

16世紀末から17世紀初頭にかけての大反乱の際、多数のスペイン人女性が都市から捕虜として連れて行かれ、召し使い、妾、妻という形でマプー

チェ男性の間で分配された¹¹⁷⁾。スペイン人女性とマプーチェ男性の間に生まれたメスティーソは、父系リネージュを通じてマプーチェと認められた。こうしてマプーチェ社会で生まれ育ったメスティーソの中にもカシーケとなり、スペイン人に対する攻撃を指揮するものがあった [Silva Galdames 1990:12-14;18]。

例えば、マケグアにはチグアラというメスティーソのカシーケがいた。彼はアロンソ・デ・リベラ総督（在位：1601-1605, 1612-1617）の義理の妹（または姉）にあたるアルドンサ・デ・カストロ・イ・アギレーラとマプーチェのカシーケ、グアラカンの間にできた子供であったが、父が死んだ際、カシーケ職を相続している [Silva Galdames 1990:18]。

マプーチェがスペイン人女性の導入を積極的に行なった要因には、おそらくマプーチェが伝統的に一夫多妻制であったこと、妻の数の多さがその人物の財力の象徴の一つであったことなどもあっただろう。しかし、いずれにせよ、既に述べたスペイン人、メスティーソの導入と並んで、マプーチェたちが人種的にかなり開放的な態度を見せていたことがわかる。また、始めからそれを意図していたかどうかはわからないが、こうした関係から生まれたメスティーソたちも、マプーチェ社会に同化されることによって、やはりスペイン人に対する戦闘に役立っていたといえるだろう¹¹⁸⁾。

こうした状況は「防戦」期にも続き、危惧の念を抱いたオソーレス・デ・ウジョーア総督（在位：1621-1624）は1622年、「防戦」に反対して次のように述べている。

「さらにまずいのは、この時期に敵側へ移り、彼らと共に暮らすようになった兵士が46人を超えていることだ。こういう連中は日に日に増えていく恐れがある。なぜなら [マプーチェは] 以前のように彼らを殺しはしないからだ。そして彼ら [脱走兵] は、破壊された都市で捕獲された女性から生まれたメスティーソたち（このものたちもだんだん増えて行っているのだが）と共に毎日境界地帯へやって来ては、実に決然と [スペイン人側に対して] 襲撃を行なっているのだ。」（[] 内訳者） [Boldrini 1990:32]。

要するに、マプーチェは、主にスペイン人に対する抵抗を有利に展開するために、マプーチェ出身者のみならず、スペイン人やメスティーソをもかなり積極的にマプーチェ社会に導入し、これを利用していったといえるだ

ろう。

以上から、この時期のマプーチェ社会の、スペイン人側社会に対する態度をまとめておこう。すでに見たようにマプーチェは、スペイン人側からの支配、軍事攻撃といった、いわば全社会レベルでの脅威に対しては、これに断固として抵抗していたという側面が強い。しかしながら、それが必ずしもスペイン人、あるいはスペイン系文化の機械的な拒絶ということではなかった。彼らは、自分たちにとり実利的な形で役にたつもの、特にスペイン人に対する戦いに有利になるものならば、スペイン人側の文化的、人的な要素をむしろ積極的に導入し、同化するという柔軟な態度を見せていた、といえるだろう。逆に言うならば、こうした柔軟な態度があったからこそ、スペイン人に抵抗できていた、という側面もあるだろう。

最後に、スペイン人側に友好的なマプーチェ集団の存在について簡単に触れておきたい。

現在手元にある資料では必ずしもはっきりとしたことはわからないが、遅くとも17世紀初頭には、ビオビオ川以南に居住しながらスペイン人側に友好的なマプーチェ集団が既に一部存在していたと思われる。例えば、アラウコ地区の集団などがそうであった、と推定される。なおバルディビア神父は、1614年頃、アラコウ地区のインディオがプレン地区のマプーチェの攻撃を受けていた、と指摘している [Zapater 1989:75-76]。

また、ビジャロボスも、すでに17世紀のほぼ第二四半世紀(1623-1656)の時期には、ビオビオ川付近のマプーチェ集団がスペイン・クリオーリョ軍に安定的な形で協力し、「友好的インディオ *indios amigos*」と呼ばれるようになる、と述べている [Villalobos 1989, 14]¹⁹⁾。

いずれにせよ、基本的にはスペイン人側社会に敵対していたという性格が強い16世紀中葉から17世紀中葉の時期においても、マプーチェ社会はスペイン人側社会からの影響を既に何らかの形で受容していた、といえるだろう。

<結論>

本稿を執筆するにあたって使用した参考文献、とくに一次資料が限られているため、以下の結論はあくまでも暫定的なものとしたい。

16世紀半ばから17世紀半ばにかけ、スペイン人は砂金開発や耕作の労働力を徴発するため、マプーチェを軍事的に征服・支配することを試み、

あるいは売却用の奴隷を獲得するために、これに軍事攻撃を加えてきた。こうしたスペイン人の意図に対し、マプーチェはスペイン人を敵とする共通の意識のもと、ほぼ恒常的な形で軍事抵抗を繰り返してきた。特に、1598年から1604年にかけての全面蜂起により、ビオビオ川からトルテン川にかけての地域に建設されていた都市を全て破壊し、この地域におけるスペイン人の影響力を著しく減退させた。

しかしながら、ビオビオ川以南の地域も含め、マプーチェたちは、スペイン人側からの影響を全面的に拒絶したのではない。彼らは、実利的な側面、特に武器や戦闘技術といった戦略的な側面において、敵であるスペイン人社会側の文化的・人的要素をむしろ積極的に導入することにより、スペイン人に対する抵抗をより有利な形で行なうという柔軟な姿勢を見せていた。

また、遅くともすでに17世紀初頭には、ビオビオ川以南に一部スペイン側に友好的な集団も存在していた。

つまり、この時期のマプーチェ社会は、基本的にスペイン人側の支配の意図に対して抵抗していくという特徴に支配されていたと同時に、スペイン人側からの影響を何らかの形ですでに受容していた、といえるだろう。

こうした、スペイン人側社会からの影響の受容は、17世紀の中ごろから、より大規模に、より多くの側面で進展してゆく。1641年には、植民地当局や軍の一応の支持のもと、一部のマプーチェ集団との間に「キジンの和平」がもたれる。もちろん、1654年～56年の全面蜂起にも見られるように、これによって急に戦闘状態が消滅するわけではない。しかし、これ以降もたびたび「和平」あるいは「交渉」が開かれ、両社会の関係のある程度安定的な調節システムとして次第に確立されてゆく。また、常備軍に所属する「友人隊長 capitán de amigos」とよばれるメスティーンがマプーチェ社会内部に駐留し、カシーケとともに影響力を発揮するようになる。両社会の間に平和的な形での交易も盛んとなり、マプーチェの間での修道会の布教活動もある程度積極的に展開されるようになる。

そして、19世紀の初頭、独立運動が起こったとき、大半のマプーチェ集団は「王党派」として参加し、数年にわたり独立派のクリオーリョたちと「決死戦」を戦いぬく。

少なくとも17世紀の半ば頃まで、基本的にはスペイン人の支配に抵抗していくという性格の強かったマプーチェがこのような行動を取ったのはな

ぜか。彼らのスペイン人に対する意識にどのような変化が生じていたのか。こうした行動はマプーチェがスペイン人側社会に統合されてしまったことを意味するのか、それともスペイン人側からの影響をある程度受け入れながら、本質的な自立性を守るためにマプーチェが行なったしたたかな選択であったのか。またスペイン人側は、マプーチェに対する方針をどのように変更したのか。こうした疑問については、今後の研究課題として一つ一つ解明して行きたいと考えている。

(注)

- (1) こうした状況は「キジンの和平」で急に消滅するわけではない。しかし、「キジンの和平」を一つの契機として、両社会の間に対話のシステムが少しずつ確立していったという意味から、本稿ではこれをもって両社会の関係における一つの境目と考えることにする。なお、ビジャロボスは両社会の関係の変容に関する研究において、マプーチェの最後の大規模な蜂起が下火となる1657年を境に戦闘状態が支配する時期と平静状態が支配する時期の2つに大きく分けている [Villalobos 1989]。
- (2) スペイン人たちは、今日のアラウコ地区に流れていた「ラグコ Ragco」という川の名にちなんでマプーチェのことを「アラウカーノ araucano」と呼んだ [Bengoa 1987: 19]。

一方、その北側、アコンカグア川流域からマウレ川流域にかけてはマプーチェが「ピクンチェ picunche (北の人々)」と呼ぶ民族が住んでいた。ピクンチェはすでにスペイン人到来時、地域によって差はあるものの、政治的または文化的にある程度インカ帝国の影響下に入っていた。そして、スペイン人に対してもそれほど抵抗を示さず、比較的短期間にその支配下に入った。

他方、トルテン川流域よりも南、今日のバルディビア、オソルノ、ジャンキウエ州にかけての地域には「ウイジチェ huilliche (南の人々)」とマプーチェが呼ぶ人々が住んでいた。彼らも、スペイン人到来時はそれほど抵抗を示さなかったが、16世紀末のマプーチェ全面蜂起時にはこれに協力して反乱に加担する [Larraín Barros 1987:135-152, 164-165, Mapa N°2]。

なお、マプーチェ、ピクンチェ、ウイジチェはほぼ同一の言語を話していたことからこの3者を総括して「マプーチェ」と呼び、狭義の「マプーチェ」を「アラウカーノス」と呼んで区別する研究者もいる。

- (3) エンコミエンダを通じた原住民労働力の徴発をコントロールするため、1559年にいわゆる「サンティジャンの規制」が発表されている。同規制では、コンセプシオン、インペリアル、カニエーテ、ビジャ・リカなどマプーチェ居住地域における砂金採取労働については、次のように定めている。

エンコミエンダとして割り当てられた原住民のうち、砂金採取労働に用いることのできる者の数の上限は、カシーケを除く18才以上50才未満の原住民総数の6分の1で、女性は除くものとする。投入される原住民は、二ヵ月ごとの輪番制に基づいて働く。

採取された砂金の6分の1は原住民の取り分とする [Jara y Pinto 1982:31]。

しかしながら、1580年に発布された「ガンボアの規制」の条文の中で、「サンティジャンの規制」は守られてこなかったと指摘されていることから、実際にはエンコメンデーロによる原住民の労働徴発は苛酷な形で続けられたものと思われる [Jara y Pinto 1982:59]。

- (4) 例えば1559年、インペリアルやブレンでは、エンコメンデーロ（エンコミエンダを与えられた人物）がエンコミエンダを通じて割り当てられたマプーチェによって殺害された。ブレンの事件の後、他のエンコメンデーロたちも都市に避難している [Ferrando Keun 1986:69,74]。

1561年、チリ総督領で初めて司教座が置かれたラ・インペリアルには、大聖堂の他、メルセス会、フランシスコ会、アウグスティノ会などの修道院、病院、神学校などの施設が建てられ、マプーチェ居住地区に建てられた都市のうち最も繁栄した、といわれている。しかしそのラ・インペリアルですら、やはりマプーチェの攻撃をしばしば受け、金の採取活動も不安定なものであったと思われる [Guarda O.S.B. 1978:38-41]。

なお、イタタ川からビオビオ川にかけての地域は、既に16世紀からスペイン人がほぼ安定的に支配することに成功すると思われる。しかしながら、ベンゴアによれば、この地域に住んでいたマプーチェも完全に平定されてしまったのではなく、ビオビオ川以南のマプーチェの主導する反乱に呼応して、蜂起している [Bengoa 1987:14-15]。

- (5) なお、バルディビアの時代からスペイン軍には、原住民も兵士として参加している [Ferrando Keun 1986:26]。ただし、こうした原住民兵士は、少なくとも初期においては、ピクンチェなどマプーチェ以外の原住民が中心であったと思われる [Bengoa 1987:14]。

また、1560年代の初頭にはメスティーン兵も見られるようになる [Ferrando Keun 1986:83]。したがって、「スペイン軍」とはいつでも人種的な観点から見れば、スペイン人またはクリオーリョといった白人、メスティーン、インディオなどさまざまな人種の混成軍であった。

- (6) 1600年に6万ドゥカードであった常備軍用の資金は、1606年には21万2千ドゥカードに増加している [Ferrando Keun 140,167]。
- (7) 実際には、敵対的な原住民だけでなく、平和的な住民も、あるいは奴隷の最低年令である10才半に満たない少年や少女も、偽造書類により奴隷として売却されていた [Zapater 1989:57]。
- (8) フェランド・ケウンによれば、1580年に出された「ガンボアの規制」では、納税義務のある18才以上50才未満のカシーケを除く原住民は、租税を支払うか労働奉仕を行なうかのいずれかを選択できる、と規定している。しかし、原住民たちがそのいずれも履行しなかったため、結局わずか3年で労働奉仕義務制に戻っている [Ferrando Keun 1986:110-111]。

また、1621年に発布された「エスキラーチェの規制」は、サンティアゴ、コンセプション、サン・バルトロメ・デ・ガンボア（現チジャン）、ラ・セレーナ各都市の管轄区域内に住む18才以上50才未満のインディオは労働奉仕を免除され、その代わりに年

10.5ペソの租税を支払わなければならない、と規定している [Jara y Pinto 1982: 90]。

この「エスキラーチェの規制」もエンコメンデーロスたちの反対などにより、結局実施される前に中止されている [Ferrando Keun 1986:191,195]。

なお同規制は、「防戦」発布（後述、1612年）以降、戦闘的なインディオをエンコミエンダとして割り当てることはできないこと、また「防戦」開始以降和平に応じたインディオ、あるいは捕虜となったインディオもこれをエンコミエンダとして割り当てることはできず、国王の直属とすることも定めている [Jara y Pinto 1982:88]。

この規定の適用範囲ははっきりわからないが、「防戦」と述べていることから、おそらく主にビオビオ川からトルテン川にかけてのマプーチェ地域の原住民を指しているのではないかと推測される。

ここから、上に述べたコンセプション管轄区の範囲は、おそらく実質上イタタ川からビオビオ川までの地域ではないかと推測される。

これらの点についても、今後資料の一層の充実をはかり明らかにしたい。

- (9) 敵対的なインディオの待遇については、フェランド・ケウンの叙述でははっきりしない。しかし「エスキラーチェの規制」（前注参照）の内容から、おそらくこちらの方もエンコミエンダを通じての労働奉仕は免除されるとしていたのではないかと、思われる。この点についても今後明らかにしたい。

- (10) 以上「防戦」については、[Ferrando Keun 1986:172-193]参照。

- (11) イエズス会士のクロニスタ、イグナチオ・モリーナは、18世紀後半の段階でも、レウエ長に対する租税、労働奉仕の義務はなく、レウエ長の家族も自活しなければならない、と述べている [Molina 1978:116-117]。また、同じく18世紀後半に書かれたゴメス・デ・ビダウーレの記録によれば、各家族が先祖代々受け継がれてきた土地を保有し、これを耕して生活の糧を得ていた。またそれぞれの家族は領域を有し、何人もこれを奪うことはできない、とも指摘している [Zapater 1978:53]。

- (12) カサノバは、レボの下部単位として、リネージ集団と思われる単位が存在し、この集団の長「ロンコ lonko」の権威も限定的で、集団成員の代表者としての役割に過ぎなかったと指摘している。

より結合度の強い単位は、最小の社会単位である、一夫多妻制に基づく家族であった。カサノバによれば、スペイン人が「プリンシパレーホ principajejo」と名付けた家族の長は、自家族集団に対して実質的な権威を行使していた [Casanova 1989:39, 43]。

なお、1674年に書かれたイエズス会のディエゴ・ロサレス神父の記録によれば当時、ある人物がルーカと呼ばれる家を建設する際、親族や同じ地区の人々を招いてこれを手伝ってもらうという習慣があった [Zapater 1978:56]。このように複数の家族が関係する共同労働あるいは互助労働の習慣が、スペイン人到来以前からどの程度行なわれていたかについては、今後資料の充実をはかり、追求していきたい。

- (13) ただしカサノバは、ビバルの叙述から、あるカシーケが一時的な状況、あるいは長の個人的な資質により複数のレボを統括するということはあったのではないかと推定している [Casanova 1989:39]。

(14) 一方ビバルの叙述によれば、バルディビアの「死後」、つまりトゥカベルの戦いの後にトゥカベルにおいて大集会が開催され、エルシージャの叙述とほぼ同じ方法で、「テオポリカン」が対スペイン人戦の臨時総指揮者に選出されたことになっている。ビバルの叙述に現われる代表者の数は8名で、それぞれ3000名から6000名の兵士を従えて集合した、とされている [Vivar 1987:242-243]。なお、エルシージャの叙述とビバルの叙述に共通して現われる代表者たちが擁していた戦士数はほぼ一致している。

(15) 当初一時的な性格のものであったと思われるマプーチェの軍事同盟も、次第に恒常化していく。イエズス会士イグナチオ・モリーナの記録によれば、18世紀後半には、すでにマプーチェ地域全体がそれぞれ海岸地域からアンデス山脈地域にかけて4つのブタルマプと呼ばれる帯状の地方に組織されていた。各ブタルマプは5つのアイジャレグエと呼ばれる地域からなり、各アイジャレグエは9つのレグエ(=レボ)の集まりであった。ブタルマプ、アイジャレグエ、レグエ各レベルの指導者は「トキ toqui」「アポ・ウルメン apo-ulmen」「ウルメン ulmen」と呼ばれ、いずれも世襲であったが、これらの間の従属関係が実際に発揮されるのは、あくまでも軍事上の機会に過ぎなかった [Molina 1978:114-115]。こうした、恒常的な軍事同盟がいつごろから発生してくるのか、またこのような同盟関係が実際にどれほど強制力を持ったのかなどの点については今後検討したい。

また、スペイン人に対する恒常的な戦闘状態が、マプーチェの社会構造や経済活動にどのような変化を促したのかといった問題も、今後の課題としたい。

(16) 実際の戦闘に関するマルモレホの叙述は、バルディビアの衣装係で、この戦闘に参加したサンティアゴのインディオの長、ドン・アロンソから得た情報に基づいている [Marmolejo: 69-70]。

なお、ビバルのクロニカでは、ラウタロがマプーチェ側に移るのは、バルディビアがトゥカベルに到着する前ではなく、バルディビア軍がトゥカベルにおいてマプーチェ軍と戦っている最中のこと、とされている [Vivar 1987:238]。

(17) マプーチェに捕虜として捕まり、1614年に解放されたフアン・ファルコン神父の証言によれば、当時未だ約550人の捕虜が残っており、そのうち約350名が女性であった [Silva Galdames 1986:13]。

(18) スペイン人女性の捕虜に関する研究の中で、ボルドリーニはアロンソ・ゴンサレス・ナヘラのクロニカ(1614年完成)に基づいて、マプーチェはスペイン人脱走者を引き止めておくために、捕虜にしたスペイン人女性を利用して、とも指摘している [Boldrini 1990:30]。

(19) 「友好的インディオ」の例は、マプーチェ社会のスペイン人社会との関係における変化を考える上で重要だと思われるので、これがいつごろから、どの程度の地域で、なぜ発生してくるのか、といった問題は今後の課題の一つとしたい。

〔参考文献〕

- Bengoa, José, *Historia del pueblo mapuche*, Ediciones Sur, Santiago de Chile, 1987.
- Bengoa, José y Valenzuela, Eduardo, *Economía Mapuche*, PAS, Santiago de Chile, 1984.
- Boldrini, Gustavo, “La Cautiva: Un legado de Piel y Pensamiento” en *NÜTRAM*, Año VI, No.1 de 1990, Santiago de Chile.
- Casanova, Holdenis, “El rol del jefe en la sociedad mapuche prehispánica” en Villalobos, Sergio y otros, *Araucanía, Temas de Historia Fronteriza*, Ediciones Universidad de La Frontera, Temuco, 1989.
- Ercilla, Alonso de, *La Araucana*, Editorial del Pacífico, S.A., Santiago de Chile, 1970.
- Ferrando Keun, Ricardo, *Y así nació la frontera*, Editorial Antártica S.A., Santiago de Chile, 1986.
- Guarda O.S.B., Gabriel, *Historia urbana del reino de Chile*, Editorial Andrés Bello, Santiago de Chile, 1978.
- Jara, Alvaro y Pinto, Sonia, *Fuentes para la historia del trabajo en el reino de Chile: Legislación, 1546-1810*, Tomo I, Editorial Andrés Bello, Santiago de Chile, 1982.
- Larraín Barros, Horacio, *Geografía de Chile, Tomo XVI, Etnografía*, Instituto Geográfico Militar, Santiago de Chile, 1987.
- Marmolejo, Alonso de Góngora, *Historia de Chile desde su descubrimiento hasta el año 1575*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, sin fecha.
- Molina, Juan Ignacio, *Historia Natural y Civil de Chile*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1978.
- Silva Galdames, Osvaldo, *El mestizaje en el “reyno de Chile”*, Departamento de Ciencias Históricas, Universidad de Chile, Santiago de Chile, 1990.
- Villalobos, Sergio, “Guerra y paz en la Araucanía: Periodificación” en Villalobos, Sergio y otros, *Araucanía, Temas de Historia Fronteriza*, Ediciones Universidad de La Frontera, Temuco, 1989.
- Villalobos R., Sergio y otros, *Historia de Chile*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1988.
- Vivar, Gerónimo de, *Crónica y relación copiosa y verdadera de los reinos de Chile*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1987.
- Zapater, Horacio, *Aborígenes chilenos a través de cronistas y viajeros*, Editorial Andrés Bello, Santiago de Chile, 1978.
- _____, “Parlamentos de paz en la guerra de Arauco (1612-1626)” en Villalobos, Sergio y otros, *Araucanía, Temas de Historia Fronteriza*, Ediciones Universidad de La Frontera, Temuco, 1989.